

複雑化する社会の問題と伝統、自然、情報テクノロジー

Tradition, nature and information technology in modern society

石井晴雄

ISHII Haruo

In modern society, material affluence is becoming increasingly extreme. Conversely, various problems and potential anxieties related to housing, environment and education are increasingly becoming a threat to peace and safety. As a consequence of searching for material richness and economical efficiency, environmental destruction has grown on a global scale, and confusion has become more widespread in modern society. The main cause of this problematic situation is perhaps the current state of science and technology where every aspect and technique is complex and vast in scale. The system has become a “black box” and has started to propel itself.

Therefore, rather than discussing the characteristics and disparities of each issue segmented by modernization, such as food, environment, education, art, design, human relations and community, these matters should be first considered comprehensively in order to reconstruct their relationships. We are dependent on a social and economic system that has become extremely complex and vast in scale. It should be returned to a human-scale condition. Furthermore, in contrast to materialism, I would like to focus on the true meaning of affluence in relation to one's mentality.

Rather than blindly criticizing the current civilization of science and technology, it might be possible to find a human-scale lifestyle that is pluralistic and transparent in conjunction with the progress of current information technology, such as the internet, even within our standardized, vast and complex society and system.

はじめに

現代社会は物質的な豊かさが極まる一方、安心、安全を脅かされる様々な問題と、潜在的な不安が増大している。また人類が物質的な豊かさと経済的な効果を追求した結果、地球規模で環境破壊が進み、現代社会は複雑化し混迷を深めているかにみえる。しかしこれらの諸問題の要因は、近代の科学技術の発展にともなう経済効率優先の価値観と、それにとまってあらゆる社会のシステムが巨大化し複雑化し細分化されていることにあるのではないだろうか。

そこで近代化によって細分化され分断されてしまった衣食住、環境、教育、芸術、デザイン、コミュニティなどの個々の事柄について、もう一度根源的かつ包括的にとらなおして関係を再構築し、本当の豊かさについて考えたい。またただ単に現代の科学技術文明を批判するだけではなく、最先端の情報テクノロジーを利用した、より自由で主体的な生き方についても考えたい。

複雑化する技術

科学技術が発達する以前の伝統的な社会においては、身の周りの道具や住居などは身近な自然素材で造られ、構造も簡単だったので自分たちで造ったり治したりすることができた。しかし現代では機械や技術は複雑化し、例えば車やバイクなどの身の周りの機械でも素人では治すことができず、誰かに修理を頼まなければならない。我々は自分で造ることも治すこともできない物たちに囲まれ、それらの物に大きく依存して生活している。そのような社会の中ではすべてがブラックボックス化され、自分でコントロールすることができず、専門家や他者に任せておくしかない。

これは技術的な問題だけではなく、政治や経済、教育などのあらゆることに言えることなのではないだろうか。そしてあまりに複雑になってしまった社会や構造に対して個人は無力感を募らせ、やがて自分では何もしないで誰かに任せておけばよいという無責任と依存心がおこる。そしていつしか盲目的に体制に追従する精神構造ができあがってしまう。人の人生でさえまるで規格化された既製品のパーツを選択するように、よい学校に入って、よい会社に行き、結婚して家を建てるといった画一的な発想になってしまいかねない。大金を払って建てる自分の家でさえ既存の規格化された家に住むしかない。

ヴィクター・パパネックはそのような状況をこのように言っている。

「技術的発達と、労働の分業化、特殊化は建築業者の専門家への分化を意味する。二十世紀末の現在、主流派の建築の実務に六つの個別分野が存在する。建築家は（たいていは、投機か、銀行家／投資家の隠れ蓑にすぎない）オーナーから委託を受ける。建築家のデザインは建築業者によって実行される。彼は特別な仕事のための何人かの下請けを雇う。最終使用者は、すなわち、住宅に住み、工場で働き、監獄に入れられ、オフィスで働き、学校で授業を受ける人は、五つの他の要素である才能、思惑、欲望、専門知識、技能などの複雑な実体に直接かかわることはない。最終使用者の唯一の貢献は、土地の権利、市場の力、現存する構造体、彼または彼女についてなされた決定に消極的に適応しているように見える。（中略）建築の教育と訓練は、（経済利益がより多いので）巨大規模の建造物や大きな建築群の方向に偏っている。そのため、建築家は、ものすごい量の知的な荷物を仕事に持ち込

むが、その大部分は人間的スケールの集団的、社会的あり様を無視するものばかりである。」(ヴィクター・パバネック「地球の為のデザイン」鹿島出版会)

こうして世の中には無駄に大きな高級車、無駄に部屋数の多い家など、無駄なものであふれてゆく。売る側は利ざやの大きなそれらの商品を売ろう躍起になり、買う方もそれらの商品を手に入れようと四苦八苦する。かくして「最終使用者」である我々にできることは、ただお金を稼いでそれらの物を買うだけで、自分自身の生活や人生の主導権をほとんど持っていないかに見える。そして社会のシステムや業界の論理と収益構造自体が一人歩きし、ヒューマンスケールを無視した肥大化した構造が我々を飲み込んでゆく。

統制がきかない技術

このように巨大化し、専門化、細分化された社会では専門的なことは専門家にまかせておくしかない。したがってもし専門家が倫理観や責任感を持ち、円滑なコミュニケーションと相互チェックが働いていれば問題はないが、ひとたびそれらが機能しなくなると不正やミスによって大事故や大惨事が引き起こされる。近年立て続けに起きたコンピュータの操作ミスによる株式の誤発注問題や、原子力発電所の事故、家電製品の修理ミスや電車の操作ミスによる事故、牛肉偽装問題、株式不正取引、クレジットの不正使用、インターネットによるプライバシーの流出、マンションの構造偽装問題などの一連の事件や事故は、現代のテクノロジーや社会のシステムがあまりに巨大化、複雑化したことによるチェック不能やミス、不正によって引き起こされたことばかりではないだろう。

コリン・ノーマンは「技術文明論」の中でこう述べている。

「技術は統制がきかないものである、という考えにはいくつかの根拠がある。それは、例えば、非常に複雑な産業社会にあっては、ほとんどの人が、巨大な経済組織で比較的小さな役割しか演じられない、ということにも一因がある。技術の領域だけでなく、他の領域についても、政府や巨大企業の中央集権的な意思決定は、生活に影響を及ぼす政策づくりにおける大衆の役割をばく奪してきた。これとは別に、日常生活に直接影響を与える発電所から自動車に至るほとんどの技術は、極度に複雑なものであるというまぬがれえない事実がある。結局、多くの人々にとって、技術は自分達の理解を超える存在であり、同時に、人々は技術がほとんど統御できない存在でありながら、その技術によって生活が形づくられ方向づけられていることに気づくのである。(中略) 過去数十年の技術革命は、かくして、多くの人々にとって「ファウストの取り引き」のように感じられた。つまり、経済的、物質的な繁栄は、更新不可能な資源への高まる依存、環境悪化、さらに日常生活のさまざまな局面での規範の喪失といった、高価な買い物とひきかえに得られることになる」。(コリン・ノーマン「技術文明論」学陽書房)

我々は便利さと引き換えに、我々の魂を売り渡してしまったのかもしれない。

「専門家」という幻想

そしてこの巨大で複雑な社会は、様々な専門家なくしては足り立たない。現代では専門分化、専門

家、エキスパートという言葉は、多分に好意的にとらえられているかもしれないが、しかしバックミンスター・フラーは「宇宙船地球号操縦マニュアル」の中でこのように述べている。

「海賊は王に言った。『最後に、やってきたすべての若者にこう言うのだ。それぞれ、自分の仕事だけに専念するように。さもないと、頭を叩き割るぞ。あらゆる者の仕事を心にとめるのは、ただひとり、わたしだけでよい』。これが学校のはじまりだ。(中略) 専門分化のはじまりだ。(中略) 聡明な人間を専門家(スペシャリスト)に育てることで、王は非常に強力な頭脳の力を手にしたし、それゆえ、彼と彼の王国は陸地に強大なちからを得ることになり、だからパトロンである海賊も、ほかの『大海賊』と続ける世界規模での競争で、気づかれず、有利な立場にたてることになった。しかし専門分化とは事実上、奴隷状態の少々おしゃれな変形にすぎない。そこでは『エキスパート』は社会的、文化的にみて好ましい、したがってかなり安全な、生涯続く地位にあるのだと幻想をもたされて、奴隷状態を受け入れることになる。王国全体に関わる視野についての教育を受けるのは、ただ、王の息子に限られていた」。(バックミンスター・フラー「宇宙船地球号操縦マニュアル」ちくま学芸文庫)

「支配者」は、それが王であれ政府であれ会社の経営者であれ、自分のみが全体的な視野と総合的思考をもち、核となる技術を保持し、その他の被支配者には「専門家」となることを奨励する。「専門家」はスペシャリストなどと持ち上げられるが、結局は局所的な視野しか持たない「奴隷」として支配され利用されているということなのだ。

巨大化するシステム

技術の発達にはシステムが巨大化することを可能にし、巨大化はさらなる効率化を促進する。そして現代の社会や生産、物流といったあらゆるシステムはあまりに巨大化してしまい、専門家といえどもその巨大なシステムのパーツにすぎず誰も全体を把握できないので、例えば問題が発生しても専門家にさえその原因がわからなかったりする。そして構造が巨大になるにしたがって個人の責任感や仕事に対するモチベーションは希薄になり、一度問題が起こると責任の押し付け合いが始まる。マンションの耐震強度偽装問題などはまさにその典型的な例だろう。そしてやがて誰かがスケープゴートにされてとりあえず解決したことにするが、本質的な解決は先送りされる。そして法律などの制度は後追いで改正される。

また一旦問題が発生するとすぐ責任を追求されるので、できるだけ問題が発生ないように規制や監視が強化され、また問題を起こさないように自己規制が働き、社会全体が保守化してゆく。また思考停止して盲目的に多数意見に追従する。我々はそんな無責任で他力本願で付和雷同化した巨大なブラックホールのような社会に生きているのかもしれない。

しかし我々自身も様々な便利さと引き換えに多くのことを他者や社会に任せ、依存している。そして我々が依存すればするほどシステム自体が増殖して我々をのみこんでゆく。だからこういう社会を造ってしまったのは我々自身なのだとも言えるのだ。

過度な社会、経済システムへの依存

我々は現在のこの経済と社会のシステムに依存せずには生きてゆけない。しかし、すこし依存しすぎていないだろうか。例えば日本では医者には患者に薬を出せば出すほど儲かる仕組みになっているという。だから医者は患者にどんどん薬を出す。我々も、深刻な病気であればいざ知らず、ちょっと風邪をひいただけですぐ医者にかかってしまう。日本では健康保険は義務化されているので、国民は過度にその制度に依存するようになり、一方健康保険制度の方も近年の高齢化に伴う医療費の増大に慌てている。

そのような構図は医療だけではなくて、衣食住や教育といったあらゆることに言えるのではないだろうか。健康保険や年金や教育など、我々は多くのことを制度や企業に任せきりにしてしまっている。そしてその制度自体も大きな負担を抱えている。

ガンジーは医者についてこんなことを言っている。

「医者は薬などで一時的には病気の苦痛を取り除いてくれるが、その結果がかえって病気の真の原因—不摂生や油断—を戒めることを人は忘れる。良い薬、良い医者によって、肉体的苦痛を、簡単に一時的に治して貰って健康になったと思っていることの繰り返しで、人は何を失うのか。それは不摂生の助長と自分の肉体に対する精神の支配力である。人の心は弱くなり、自制心をなくし、真の意味で体を大切にすることを忘れてしまうのである」。

このガンジーの言葉はこう言い換えることもできるだろう。つまり便利なものや社会のシステムに依存しすぎた結果「自分にかかわるあらゆることに対する精神の支配力をなくし、人の心は弱くなり、自制心をなくし、真の意味で自分を大切にすることを忘れてしまう」と。

例えば車を買って便利になったはよいが、いつも車に乗っていると運動不足になって足腰が弱くなり、そしてそのうち車がなければどこにも行けなくなる。そしてそのうち成人病などを患い病院通いの身となってしまふ。高価な買い物をして多少便利にはなったが、その結果病気の体を手に入れることになる。

人は科学技術によって便利さを追求した結果、過度にその技術に依存するようになり、やがて自身をコントロールする力を失ってしまう。科学技術文明は一度依存すると容易には抜け出ることができない、マイナスのスパイラル構造を持っているのではないだろうか。

希薄になる働くことの楽しみ

昔は身の周りの物が壊れると自分や近所の修理屋ですぐ修理できたが、いまではそのようなことはまったくできないくらい全ての物が複雑になっている。また修理に出しても壊れた部分を部品ごと交換するか、あるいはそっくり買い換えることになる。だからこつこつと治しながら永く使うということができないので物に愛着が持てず、物を大切に使うことをしなくなる。また物を造ったり修理したりして働くことに喜びを感じることも少なくなる。すべての労働はお金を稼ぐためであり、自分は単に巨大なシステムの一部として働いているだけで、働くことに対する意欲や喜び、自尊心や責任感が得にくい社会になっている。

ミヒヤエル・エンデの「モモ」の中で、灰色の男たちに支配されてしまった町で左官屋ニコラはこんなことを言っている。

「モモ、ごらんのとおり、おれはまたちょっと飲みすぎたよ。いまじゃこれもしょっちゅうなんだ。そうしないと、あそこでやっていることに、がまんしきれなくなるのさ。まっとうな左官屋の良心に反するような仕事をしているんだ。モルタルにやたらと砂を入れすぎると。わかるかい？これだと四、五年はもつけれど、そのうち咳をただけで、落ちるようになってっちゃうんだ。インチキ工事さ、卑劣きわまるインチキ工事さ！ところがそれだってまだましなほうだ。いちばんひどいのは、おれたちがあそこでたてている家だ。あんなものは家じゃない。ありゃー死人用の穴ぐらだ！思っただけでも胸がむかむかするよ！だがな、そんなことおれになんの関係がある？おれは金をもらう、それでけっこうさ。そうさ、時代が変わったんだ。むかしはいまとちがって、おれはひとに見せられるほどのものを建てて、おれの仕事をほこりに思っただけだ。だがいまじゃ…。そのうちにいつかたんまり金がたまったら、おれはじぶんの仕事におさらばして、なにか別のことをやるよ」。(ミヒヤエル・エンデ「モモ」)

巨大なシステムの中で、個人はやる気と倫理観、責任感を喪失してゆく。マンションの耐震強度偽装問題の当事者のみならず、誰もが身につまされる話ではないだろうか？

民族学者の宮本常一は「忘れられた日本人」のなかで、日本の昔ながらの田植えの仕方の変化についてこのように語っている。

「そして話も十分にできないような田植の方法は喜ばれなかった。縄植ならば縄を引きかえるたびに腰をのばすのでつかれも少ない、その上、手を休める時間もあって、おしゃべりもできるのである。しかしその田植がここ二、三年次第に能率化せられはじめた。女たちが田植組のグループをつくって、田を請負で植えるようになったのである。一反千円でひきうける。こうすれば田の持ち主は御馳走をつくらなくていいし、また早乙女をやとい集める苦労もない。田植組に田植の大体の日を申し込んでおけば植えにきてくれる。これによって田植の御馳走をつくる事や人をたのむ苦労からそれぞれの家の主婦は解放せられたのだが、田を持つ者は一日でも二日でも植えに出ねばならない義務がある。それによって田植組は一定の労力を獲得しているのである。この制度は女たちの発明であった。と同時に能率をあげれば収入もふえるので、田植のおしゃべりも次第に少なくなりつつある。話してもそれが一つの流れをつくらなくて断片的な話になる。同時にまたラジオやテレビの普及が徹底して来て、主婦たちはみんな標準語になれて来、これをつかう術も知ってきた。こうして、うちうつつむいて田植をすることは今も昔もかわりないが、それでもずいぶん変わってきましたの、田植をしても皆モンペをはくようになったし、編笠が経木の帽子になったし、田植は女の仕事ときまっていたのに男も手伝うようになりましたの。しかし田植がたのしみで待たれたような事はなくなりました。」(宮本常一「忘れられた日本人」岩波文庫)

女たちが田植えの際にモンペをはくようになったとあるのは、それ以前は女たちは田の神様が喜ぶと言って田植の際にも着物の下にはなにもつけなかったというし、田植えを男も手伝うようになる以前は、女だけでしかできないような話などをして盛り上がっていたといい、おおらかに仕事をしてい

ただ。

本来働くこととは経済的な利益を得ることではなく、自分自身や家族、共同体の生活を維持するため行為であり、そこには楽しみや充実感、共同体に対する連帯感などのさまざまな感情が介在していたはずだ。しかしひとたびそこに効率性や経済原理が導入されると、確かに便利になって収入もあがったが、のどかな労働風景は一変し、働くことはいともたやすく時間を切り売りするだけの無味乾燥なものになってしまう。

現代は社会全体が経済効果の名のもとにもっとよい車を買いなさい、もっとよい服を買いなさい、もっとよい家を買いなさいと物売りつけ、社会全体がまるで相互搾取状態になっている。現代社会は物やマスメディア、教育、政治、経済が長年にわたって造り出した付加価値という幻想であふれており、人々はもはやそれが幻想であるということすらわからなくなっている。人間にさえ学歴、職歴、年収という幻想をたくさんつけているその一方で、何をしたらよいのかわからないとか、自分の価値が認められない、なにもやる気がしないという人が増えているという。共同幻想に満ちた社会の中で人間の精神は疲弊してゆく。

今、仕事をしていても働く意欲をなくし、自分がしている仕事の意味が感じられないという人たちが増えているという。ある調査によると彼らの仕事のモチベーションの第1位は「やりがい」であり、お金や名誉がトップではないのだという。お金も必要だがそれだけではない。現代の様に物質的に豊かな時代においては、お金や物質的な価値以上に精神的な充足が働く事にも求められており、お金や名誉、社会的地位というものは付随的なものにすぎない。仕事にやりがいを求めるということは、何かを得る手段として働くのではなく、働くという行為やプロセスそのものを目的化し、意味と充実感を求めているということだ。物質的に充足している現代の社会では、もはや物ではなく行為やプロセスが価値を持つのであり、自分の時間を切り売りしてお金の為に自分の人生を捧げることに意味を見いだせない。

現在ニートといわれる定職につかない若者が社会問題になっていると言われるが、労働を単に時間を切り売りするだけの機械的なものにしてしまっている社会自体が、「ニート」という現象を生み出しているのかもしれない。

グローバリズムという新たな経済植民地化と伝統文化の喪失

複雑化、巨大化の最たるものが、現在の世界を覆うグローバリズム経済なのではないだろうか。1990年代初頭の共産主義諸国の崩壊以降唯一の超大国となったアメリカが主導する経済至上主義的なグローバリズムによって、世界は経済原理がすべてを支配する熾烈な競争社会になりつつある。

19世紀のイギリスのデザイナー、ウィリアム・モリスのファンタジー小説「ユートピアだより」の中で、22世紀の理想社会の住人は19世紀の社会についてこのように言っている。

「われわれが聞いたり読んだりしたところから察するに、どう見ても、文明の最後の時代に人は物品の生産という問題の悪循環におちいつてしまったようですね。かれらはみごとにまで楽々と生産できるようになりました。その便利さを最大限に生かすために、しだいしだいに、この上なく込み入っ

た売買のシステムをつくりだしました（というか、そういうものを発達させました）。〈世界市場〉と呼ばれるものです。その〈世界市場〉はいったん動き出すと、物品の必要あるなしにかかわらず、ますます大量に生産しつづけるように強制しました。その結果、ほんとうに必要な品々をつくる苦勞から解放されることは（当然ながら）できませんでしたが、にせの必需品、あるいは人為的な必需品を際限なく生み出すことになりました。そうしたものは、いま言った〈世界市場〉の鉄則のもとで、人々にとっては、生活を支える本当の必需品とおなじくらい重要なものになってしまったのです。おかげで人々は、ひたすらその悲惨な制度を維持するだけのために、とてつもなく多くの仕事を背負いこむはめになったのです。」

「なるほど... で、それから？」とわたしは言った。

「で、それから、このような無用な代物を生産するというひどい重荷を負わされ、よろよろと歩いていかねばならなくなったので、人々は労働とその成果をある一つの観点からしか見ることができなくなってしまった... すなわち、いかなる品物であっても、なるべく手間をかけずにできるだけ多くの品物をつくりだそうと常につとめることです。『生産費の削減』などと呼ばれたものですが、そのためにすべてが犠牲にされました。働く者が仕事をするときに得られる幸福はもとより、まず欠かせない心のやすらぎ、最低限の健康、衣食住、余暇、娯楽、教育までもが、要するに暮らしそのものが、物品の『生産費の削減』というおそろべき必要性とはかりにかけたら、一粒の砂ほどにも値しないとされたのです。それどころか、こんな話も聞いています。この世界の多くの人にはとても信じがたいことですが、動かしがたい証拠があるので、信じざるをえません。すなわち、富裕な有力者たち、いま申した悲惨な人々の主人でさえ、かれらの富がこの極め付きの愚かさを助長するために、人の本性からすればぞっとして逃げ出してしまうはずのすさまじいながめや騒音や臭気のただなかでやむなく生活したのだそうです。要するに、〈世界市場〉が強いる『生産費の削減』という貪欲な怪物の口のなかに、社会全体が投げこまれたのでした。

中略

〈世界市場〉は食えば食うほどその貪欲さをつのらせていったのです。いわゆる『文明』（すなわち組織化された窮乏）の圏内にいる国々はこの市場が乱造するまがい物を腹につめこみ、圏外の国々を『開発』するために武力と欺瞞が容赦なく使われたのでした。

中略

要するに、犬を打てる棒が見つければ、なんでもよかったのです。それからだれか、むこうみずで、節操がなく、無知な冒険家を見つけだし（その競争の時代には楽にみつけられました）、その男に賄賂をやり、その不運な国の伝統的な社会を根こそぎにし、またそこに見られるすべての余暇や楽しみをことごとく破壊し、『市場を生みだす』ようにしむけたのです。その土地の住民にほしくもない商品を押しつけ、『交換』という名の強奪の一形式によってその天然資源をわがものにし、そうすることで『新しい需要を造出』したのでした。その需要を満たすために（すなわち、地域住民が新しい主人によって生きることをゆるしてもらうために）、その不運で無力な人々は、『文明』のくだらぬ品々を買う金をかせぐために、希望のない苦役にわが身を売るはめとなったのです。ああ。」

「ユートピアだより」が書かれた19世紀末のイギリスは、植民地からの安価な原材料と労働力をベースにいち早く産業革命を迎えたが、一方、劣悪な労働条件と大気汚染や森林破壊などの深刻な環境問題を抱えていた。それは100年後の現在の世界が直面している問題となんら変わらない。

イギリスをはじめとする欧米列強の植民地であったアジア、アフリカの諸国は、その後植民地支配を脱し独立を勝ち取ったが、引き続き安価な原材料や軽工業製品の生産者として、また安価な労働力の供給者として、そして大きな「市場」として開拓され、グローバリズム経済に取り込まれていった。そして伝統的な自足的かつ持続的な暮らしを送っていた彼らの生活に商品経済の荒波が押し寄せ、便利な「必需品」に埋もれて経済至上主義的な価値観とマスプロダクティブな単一文化に席卷され、多様だった固有の伝統文化は失われていった。また生きる知恵と民族の歴史は顧みられず、民族の尊厳は失われ、共同体は崩壊し、犯罪が多発する社会となってゆく。また地域の自然環境への配慮は失われ、豊かだった自然は安価な資源として切り売りされ破壊されていった。政治的、軍事的支配は終わっても、経済的植民地支配は依然として続いているのだ。

ところで現在我々が大きな価値を置いているお金とは一体何だろう。お金とは自分の代わりに知識、技術、エネルギーを投資してくれた他者の労働の対価として支払われ、また物やエネルギーの経済的な価値を計る抽象的な概念だ。たとえば家を作る場合、自分で作ればお金はかからないが、建築家や大工に依頼することによって、自分の肉体的、知的な労働のエネルギーを肩代わりしてもらい、その対価としてお金を支払う。そして家という物を結果として得る。つまりお金で何かを買うという行為は自分が労働に参加するプロセスを省略して結果としての物のみを得る行為であり、何かを他者や専門家に任せているという事だ。そしてプロセスに関わっていれば不可避であるはずの他者や社会との関わりが希薄になり、やがてお金さえ払えば良いとして自分ではなにもしないで結果だけを求め、結果主義、拝金主義、成果至上主義的な価値観にいきつく。

巨大なシステムにおいてはすべてはお金を介してやりとりせざるを得ない。お金を介してすべての物や事がやり取りされる社会においてはすべての関係は間接的で、ダイレクトな関係は阻害され、例えば物がどのように作られどのよな経路で運ばれるのか、また食べ物が誰によってどのように作られるかなどについて把握や実感ができず、人間は他者や自然環境から隔離され、その結果まわりの環境や他者に対する配慮が希薄になり無自覚に自然環境を破壊してしまったりする。

また物理的な質量を持たない抽象概念でもあるお金は、いともたやすく所有者や物理的な距離を移動し、富の移転と集中化を可能にし、極端な貧富の格差を生むことになる。そしてやがて実体のない投機的なマネーゲームが世界中を席卷することになる。

我々にできることー全てはつながっている

現代の社会においては環境問題、教育問題、犯罪の多発、医療、社会保障、食の安全、伝統文化の喪失、心の問題など様々な問題を抱えている。しかしそれらの問題は、この社会があまりに巨大化し複雑化するとともに専門化、断片化していることに起因しているのではないだろうか。現代において食料、環境、教育、宗教、芸能等の分野はすべてが独立して別個のものとしてカテゴライズされ、そ

れらを相互につないでいるものは社会システムや経済システムといった間接的かつ機械的なものになっている。

伝統的な暮らしをしているコミュニティに目をむけると、近代社会では別個のものとして扱われている様々なことがら、全体として分ちがたく有機的に関連していることがわかる。例えば多様な世代の人々が共同体で農耕や狩猟生活をしながら生活することを通して、子供たちは農耕や狩猟、食物の加工、保存などの知恵を自然と獲得していったらう。また秋になれば皆で収穫し、豊作を祝って祝祭をおこなう。そこには食料、環境、教育、コミュニティ、社会、福祉、伝統、宗教、芸能といった、現代において別個のものとしてカテゴライズされているそれらのことがら、一体となつて一つの循環の中に存在している。その中では何一つ独立して存在せず、すべては不可分な関係にあったはずだ。われわれは、失われてしまったそれらの一体性をもう一度回復することはできないのだろうか。

暮らしが変われば世界は変わる

我々はこの巨大で複雑なグローバルな社会に生き、それらに大きく依存して生活している。そして我々がこの社会のシステムに依存すればするほど、この社会は肥大化し混迷を深めてしまう。社会が混迷しているとすれば、それはこの社会に依存している我々自身にも責任があるのだ。しかし我々はこの社会に依存せずに生きてゆく術を知らない。我々は自分の食べる物でさえつくることができない。そして誰もこの巨大化した社会の中で細分化された殻に閉じ込められ、全体性を見失い、「奴隷状態」から抜け出せないでいる。

この世界は今、地球規模の環境破壊や地球温暖化、戦争、飢餓などグローバルな問題に直面している。そして我々はそれらのことは我々個人がコントロールできる問題ではないと思っている。しかしそれらの多くの問題は我々の日常の生活と密接に関連しており、けして無関係ではないのだ。例えば我々が日常運転する車からは多量の二酸化炭素が排出され、それが地球温暖化を招いている。またガソリンや石油を消費することによって、石油の利権に絡む国家間の紛争がおこる。また携帯電話に使われる希少な鉱石の採掘を巡って、アフリカで紛争がおこる。そして普段何気なく使っている紙製品によって、地球上の多くの森林資源は失われようとしている。

このグローバルな世界ではすべてのものがリンクしている。我々は、我々のミクロな日常の行為の集積がマクロな環境破壊や戦争を引き起こしているということを、もっと思いおこすべきかもしれない。だからミクロな行為や価値観、生活、意識を変えなければ、マクロな問題は解決できない。逆にミクロな行為、価値観、生活、意識を変えれば、マクロな環境も変わるかもしれない。だからまずは自分の意識、生活、暮らしの価値観から見直してみることから始めてもよいのではないだろうか。まずは自分たちでできることはなにかを考えてみたい。

1. 本当に必要なものだけを選択する

この世の中は、売り手の論理だけで作られた多くの無駄なものであふれている。我々はそれらの物

を使っているようで実はそれらの物に埋もれ、その状態を維持することに四苦八苦し、身動きがとれなくなってしまっているのかもしれない。だからまずそれらの無駄なものをもう一度洗い出し、本当に必要なものだけを選択したい。そして自分たちの生活をもっとシンプルで身の丈にあったものになりたい。

2. 自分で主体的に関わる

また消費によってすべてのことを他人任せにせず、自分の専門性に閉じこもらず、また専門家に依存しすぎないで、食、住、衣などのあらゆることに関心を持ち、それらのことに主体的に関わりたい。可能であれば農耕によって野菜や穀物を育てたり、収穫した作物を調理したり加工して食べたり、また自分で家づくりに参加するなど、自分たちでできることから始め、体験的を通してそのプロセスを楽しみたい。またできるかぎり複雑さを排除し、可能なかぎりミニマムなシステムによって生活し、自分自身がコントロールできる範囲で物や自然や人とのダイレクトな関係を創りたい。

ものや食、地域社会、教育など日常のあらゆることは本来とてもシンプルなことで、我々が関与することが十分可能であったはずだ。しかし巨大化し複雑になってしまった現代の社会においては、我々の日常のことでさえ自分自身で関与することが困難なことのようになってしまう。だから本来のシンプルさ立ち返り、日常生活の中で少しずつできることを楽しみながら始めたい。それは時に自己責任を伴うかもしれないが、それ以上に心身の充実と安心立命を与えてくれるだろう。そして効率優先と経済至上主義の中で見失ってしまったさまざまなことをもう一度思い出させてくれるだろう。

3. 暮らしを通して自然と関わる

民俗学者の赤坂憲雄氏はあるマタギのこのような言葉を紹介している。「原生林は役にたたない。人間が少しだけ傷つけ殺した森、そこからいっせいにワラビやゼンマイが出てくる」と。森という言葉が人間の手の入っていない原生林をあらわすのに対し、林という言葉は「はやす」からきていと言われ、人類は太古より原生林を伐採、植林して栗やクルミなどの木の実や果実を栽培し、あるいは開墾して野菜や穀物を栽培してきた。また薪やキノコ、竹の子、染料、衣類や住居の材料など、生活に有用な様々なものをそこから得てきた。普段の生活空間の周辺に里山や畑などの生活と密接な自然環境を作り上げ、そして生活の営みを通してその自然環境を維持、管理してきたのだ。太古の昔より人類は自然と共生し、持続的な生活を維持してきた。そこには多くの生きてゆくための、そして自然環境を維持するための知恵が受け継がれてきたはずだ。さもなければ人類は数百万年もの間生きのびることはできなかったにちがいない。自然とは単に「保護」されるものではなく、また鑑賞するだけでなく、人間が生活を通して関わることによって自然と人間はお互いに維持されてきたのであり、いわば自然と人間は共生関係にあったのだ。

現在、自然保護が叫ばれている一方、我々の生活は自然からますます遊離している。農耕や採集、遊びなどを通して自然と関わり、自然環境を人間の営みと密接に関連する場として持続的に維持してゆくことが必要だろう。

4. 伝統文化を見直す

日本は現在、第二次大戦後60年を超え、戦前の生活や伝統文化を知る世代は徐々に姿を消しつつあり、日本の伝統文化と知恵の継承は危うくなりつつある。

戦後日本は高度経済成長によって発展してきたその一方で、経済優先の価値観を受け入れ、地域の自然環境や風土に根ざした持続的な生活様式と伝統文化は、グローバリズム経済とその価値観によって放逐されつつある。日本は過去の歴史において欧米列強の植民地化を免てきたが、経済的に、文化的に完全に植民地化されつつあると言えるだろう。

だから今一度自分たちの地域の文化や歴史、伝統、価値観を再認識し、伝統や風土に根ざした衣食住や生活様式を見直し、より持続的で快適な環境と健康な生活をとりもどしたい。そしてグローバリズムによって失ってしまったアイデンティティと物質面のみではない本当の豊かさをとりもどしたい。

5. 情報テクノロジーを有効に使う

現在、インターネットなどの情報テクノロジーが発達し、個人が居ながらにして自由に情報の受信、発信ができるようになった。それに伴い個人の能力が発揮できる可能性が飛躍的に高まりつつある。このような時代にあっては単に懐古的に過去の伝統や自然に回帰するのではなく、新たな生活様式や価値観を創造するためにインターネットなどの情報テクノロジーを使うことは、とても有効であると思う。

情報テクノロジーそれ自体はブラックボックスの固まりであり、また現代のグローバリズムを築いた元凶のひとつでもある。そして現在ネット上にはまるでパンドラの箱を開けたように、人間のポジティブな側面もネガティブな側面も一挙に噴出している。しかし情報テクノロジー自体は単なるツールにすぎない。それをどう使い、どのように関わるかは我々自身の選択にかかっている。

現在大いに発達しているパーソナルコンピュータやインターネットの基礎は、1960~70年代のアメリカのヒッピー世代の開発者たちの手によって、誰もが手軽に主体的に情報を発信、受信、検索、共有をおこなうことができるパーソナルなツールとして開発されてきた。そしてそのスピリットは今も web や blog や google などに引き継がれていると思う。

インターネットなどの情報テクノロジーが発達するにつれて、我々の生活や価値観、意識、社会は徐々に変わりつつある。まず従来は時間、空間、大きい、小さい、多い、少ない、遠い、近いといった古典的な物理的概念や、コストなどの経済観念は大きく転換を迫られている。また地理的な局所性はネガティブな要因ではなくなり、むしろ豊かな自然環境や固有の文化、地域社会と共生した豊かな暮らしをもたらすものとして再評価されるであろう。また web や blog などの画面上ではあらゆるものが等価に表示されるので、従来の地位や権威、既得権、組織といった社会的枠組みより、いかに主体的に情報を発信し行動するかという個人の意識がより重要になってくるだろう。またありとあらゆる情報や意見、価値観がネット上に存在するようになるにつれて、いままでマスメディアによって画一化されていた人間の価値観はより多様化され、我々の意識はより個性化されるだろう。そして世

界中の情報が検索エンジンによって網羅され組織化されるにつれて、今まで埋もれていた情報が再び日の目をみるようになり、小さなビジネスや個人的な情報もその存在価値を認められるようになるだろう。それにともなって地域社会の特異性や伝統文化の多様性にも焦点があたり、中央集権的で一元的な社会から分散型の多元的な社会へと徐々に移行してゆくのではないだろうか。また blog や MIXI などの SNS によって情報の収集と発信は格段にしやすくなり、バーチャルな次元で意識は共有され、新たなコミュニティが形成されつつある。またオンラインフリー百科事典の wikipedia、オープンソースやフリーソフトなどの新しい概念によって、従来の経済観念は覆され、人間の知識と知性、理念は共有され、新たな市民知、集合知が生まれつつある。

デジタルな情報テクノロジーと自然環境や伝統、コミュニティ、人間の意識、知性などは対立する概念ではなく、むしろ相補的で相乗効果的な関係にあるといえるだろう。新しい情報テクノロジーは個人をベースとして発想したものであり、透明性を前提としている点で、ブラックボックス化を推進してきたそれ以前の技術とは一線を画すものである。

「Think Globally, Act Locally (グローバルに考え、ローカルに動せよ)」と言ったのは1969年、環境保護団体「Friends of the Earth」創設者、デビッド・ブラウアーであったが、現代は個人がマクロな視点を持つ一方でミクロな領域で他者とつながり、グローバルな視野とローカルな視野を同時に持ちうる時代が到来している。現在、我々は文字通り「グローバルに感じ、ローカルに生きる」時代に生きているのだ。

グーテンベルグの活版印刷術の発明が宗教改革とルネサンスを、羅針盤と西洋航海術の発達が大航海時代を可能にしたように、新しいメディアは新しい文明を興隆させる。我々は今まさに情報テクノロジーによってもたらされた新たな文明の黎明期を迎えようとしていると言っても過言ではない。ルネサンスの時代の人々が一点透視図法に象徴されるような新たなパースペクティブを獲得したように、我々も現代の情報テクノロジーによって新たな意識のパースペクティブを獲得しつつあるのだ。バックミンスター・フラーは「人類に迷信や劣等感につくられたのは、すべて、底知れぬ無学と無知という条件下、奴隷のように生き残らざるを得なかった昨日までの歴史のためだ」と言った。我々がいつまでも無学で無知な「奴隷」状態に甘んじていなければならない時代は終わりつつあるのだ。

おわりに

20世紀初頭の量子力学や深層心理学はニュートンの機械論的思考を脱し、個と全体は不可分であることをあきらかにした。そして1970年代以降のニューエイジサイエンスはフラクタル、ホロニック、シナジーといった概念をとおして、部分と全体はホロニックに繋がっていることを教えてくれた。そして現在、パーソナルコンピュータやインターネットなどの情報テクノロジーによって人間の意識や能力はサイバネティックに拡張され、ホロニックな世界観が現実の世界において具現化されようとしている。時間や距離、質量を超えるという情報メディアの特性は、本来自由である人間の精神と親和性のあるものなのかもしれない。いや本来自由な精神の持ち主である人間の欲求が、個人を主体とする情報テクノロジーの発展をもたらしてきたのだ。そしてデジタルテクノロジーはソフトにしなやかに

我々の日常生活に溶け込み、密かに意識を変容させ、現実世界を変えつつある。

だからたとえ小さな一歩かもしれないが、自分が今いるところから一歩を踏み出すのだ。ミクロな行為がマクロにつながっている。その行為を阻害するものは唯一、古典的な機械的思考という幻想に捕われた古い意識にすぎない。そして「無力な個人」という巨大で複雑な近代社会が創りだした幻想の中で埋もれてしまった自分自身のパワーをもう一度取り戻すのだ。

参考文献

- ・ヴィクター・パバネック著、大島俊三、村上太佳子、城崎照彦訳
「地球のためのデザイン 建築とデザインにおける生態学と倫理学」鹿島出版会 1998
- ・コリン・ノーマン著、青山貞一、池田こみち訳「技術文明論 持続可能社会への展望」学陽書房 1986
- ・バックミンスター・フラー著、芹沢高志訳「宇宙船地球号操縦マニュアル」ちくま学芸文庫 1968
- ・ミヒャエル・エンデ著、大島かおり訳「モモ」岩波書店 1976
- ・長崎暢子著「ガンディー 反近代の実験」岩波書店 1996
- ・宮本常一著「忘れられた日本人」岩波文庫 1984
- ・岡田康博著「縄文文化を掘る 三内丸山遺跡からの展開」NHKライブラリー
- ・喜多千草著「起源のインターネット」青土社 2005
- ・梅田望夫著「ウェブ進化論」ちくま新書 2006
- ・小川 浩、後藤康成著「Web2.0 BOOK」インプレスジャパン 2006